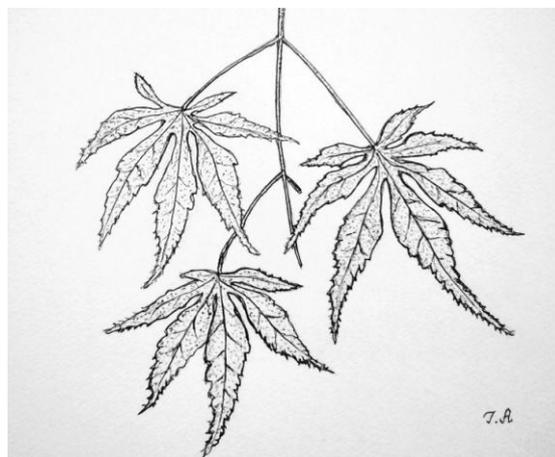


白バラ通信

No.18

長く暑かった夏もおわり本格的な秋になりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。今回の白バラ通信は、秋に延期していました2010年度総会（第4回総会）と、講演会のお知らせ、沖縄に関わるエッセイ1編と、さらに本通信としては初めて詩1編を掲載しています。お楽しみください。



神大教職員九条の会 講演会と第4回総会のご案内

11月16日（水）18：00から。神戸大学理学部Z棟C103室にて

講演会 18：00－19：30

“安保と沖縄”

- ・ 和田進さん（神戸大学人間発達環境学研究科）

「沖縄・普天間基地問題の経緯」

- ・ 末本誠さん（神戸大学人間発達環境学研究科）

「基地建設を受け入れたシマの戦後」

第4回総会 19：30－20：00

- ・ 活動報告
- ・ 会計報告
- ・ 活動方針
- ・ 役員承認

基地建設を受け入れたシマの戦後

末本 誠 (神戸大学人間発達環境学研究所)

この夏は、これまで書き溜めてきた沖縄関連の論文をまとめる作業に追われた。足りない資料を補うために沖縄に渡り、戻ったばかりだ。民主党政権になって、普天間基地の移転問題に新しい方向が生まれることを、沖縄に関心をもつ誰もが願ったにもかかわらず、たらい回しの末、新基地建設の候補地は辺野古に舞い戻ってしまった。無策無能な政治に腹を立てながら、晴れぬ気持ちで辺野古一帯を車で走り回ってきたところだ。

宜野座方面から北上して最初に訪れた久志区は、古い木造の沖縄の民家が建ち並ぶ静かなシマ(村)だった。お盆の行事でにぎやかに飾り付けられた区の公民館広場には、甲子園で優勝した興南高校のシマ出身の野球部員二名の活躍を称える、横断幕が強い日差しの下で揺れていた。さらに北上して豊原区に入ると、道路は突然広くなり基地建設への見返りとして建設された、大型の公共施設がいくつも目に入ってきた。ひっそりとしたシマの景観の中で、それらの建物群はいかにも異質な、どこか別の世界から入り込んだインベーダーのように見えた。「本土」の地区集会所に当たる区の公民館は、グランド付き平屋づくりの広大な施設に変わっていた。

高専の校舎や寮を横目にしながら辺野古区に入ると、シマの入口に「辺野古交流プラザ」という区の新しい公民館が新たに建設されていた。9億円の建設費を要したといわれる建物に入ると、誰もいない正面ホールには前夜のお盆の酒盛りの跡が生々しく残っていた。寝乱れた他人の寝室を覗いたような気分になり、思わず目をそむけなくなった。豪華な設備に対するマスコミの批判を気にしたのだろうか、見てみたかった上階は「部外者立ち入り禁止」の立て看板によって遮られていた。大浦湾に面した古くからの辺野古区の「カミ」は、小さな集落だ。その後背の高台に、1950年代の米軍基地建設に合わせて作られた「シモ」の地域がある。急坂を上って「シモ」に入ると、そこには廃れた雰囲気のかつての歓楽街が広がっていた。その先にキャンプシュワープがあり、新基地建設の候補地とされる岬がさらにその先にある。

普天間基地の移転問題で私が不思議に思うことの一つは、辺野古区の住民の一部が様子を見ながらであれ積極的に基地建設の推進を訴えていることだ。ヘリポート基地建設が問題となった10年前のことだが、私は仲間とともに字誌に関する調査のため、辺野古区を訪ねて区長や字誌の編集者の話を聞き、海端の「命を守る会」でも基地建設に反対するオジイやオバアの話を聞いたことがある。夕方になって区の事務所でもある公民館に戻ると、そこでは推進派の区の長老たちが酒盛りを始めていた。抜け出しそびれ、短時間だが酒宴に加わることになった。隣は推進派のリーダー格の老人だった。その場の話で今も鮮やかに印象に残っているのは、その長老が当時話題になっていたフロート式のヘリポート基地では駄目だと、しきりに力説していたことだ。老人は海をコンクリートで固めなければ、

意味がないと言う。意味がないというのは、お金にならないということだ。そのとき私は、今しがた目にしてきた美しい海を、本気で分厚いコンクリートの塊に変えたいと願っている人がいることを知った。

辺野古の歴史を調べてみると、現在の新基地建設推進の世論のルーツは、1950年代後半の米軍基地建設にあることがよく分かる。このときは、沖縄中が「島ぐるみ闘争」にわき立つ最中、辺野古区はひとり条件闘争に方針転換したのだった。この時期、基地建設で全島から集まってくる労働者を当て込んで、区は自ら集落の後背地を開発し歓楽街の形成に乗り出す。その結果、それまでの人口 600 人の寒村が、銀行が支店を出しバスが頻繁に通う人口 2000 人の街に変わった。これを地元の住民は「発展」と呼ぶ。しかし街の繁栄は、ベトナム戦争の終結とともに終焉を迎える。「発展」が「衰退」に変わったのだ。

現在の辺野古区の新基地問題への反応は、この「発展」と「衰退」の意識に関わっている。区の行政の中心にいる住民は、現在でも 50 年代の区の「発展」を先輩の「英断」のおかげと語り継いでいる。新基地は区を、再び「発展」に向かわせる切り札なのだ。こうした感覚はもちろん歪んでいる。しかしその歪みが現実の力となり、「沖縄イニシアチヴ」のように基地を産業と捉えるイデオロギーとなって作用している。



宜野湾市中心部を占める米軍普天間基地

もしも戦争になったら

魚住 和晃

もしも戦争になったら

夫が戦場に駆り出されるかもしれない

そして、殺されるかもしれない

人を殺すかもしれない

非情に耐えかね逃げ出して

裁判にかけられるかもしれない

もしも戦争になったら

物価が高騰することだろう

食べるものがなくなっていくことだろう

作らなくてもよかった人殺しの道具を

強制され作らされることだろう

それを否めば

罪人にされてしまうのだろう

もしも戦争になったら

自衛隊や警察がいばり出すに違いない

言うべきことを言えなくなるまでに

心を縛り

暴力が横行し始めるに違いない

人が人を信じられなくなるに違いない

人間の価値観が変ってしまうに違いない

その中を巧妙に立ちまわる

死の商人が登場してくるに違いない

もしも戦争になったら

日本はたちまち焼土と化し

家々が焼け、文化が消え去り、

人々の生きた証しのすべてが失われる

まわりの誰がいつ死ぬかもわからない

家族が、友人が、私が

勇気や真心など何も通じはしない

すさまじい地獄が一瞬にして広がる

もしも戦争になったら

地球がどんな悲惨な姿になるかと

日本人が最もよく知っている

戦争になって核が使われたら

人類すべてが破滅に陥ることを

日本人が最もよく知っている

だから私たちは戦争に反対する

核に反対する

九条を守る

九条の会に参加して立ち上がる

(作者は、神戸大学教職員九条の会・共同
代表)

